

『雄鶏と道化のパヴァーヌ』（一）

カルロス・デ・ロツカ⁽ⁱ⁾
三角 明子 訳

デフロンデイス
深淵より

この苦い茶から顔をあげ 不眠に悩む客であるわたしは
わずかに覗いた悪魔のほうへ顔を向ける
夜になり 旅と かなり前からこのふたつのこめかみを
吸い上げる長い狂気に疲れて
わたしは目に見える己が存在のなかへと入っていく
血管が燃え、顔は死衣で覆われ
灰と、おのれの血の入ったコップに顔を向ける
潰瘍ができた背中、脇腹の痛みを抱え、勇敢な
敵に赦しを与えるのだが
自分自身と魂の敵はこの自分なのだ
芯から独り、疲れ果て、
十字架にかけられたわたしの脊椎の木材のうえに
深淵の眺望を得るキリストのように
望みも絶えた

眠ると両目に襲いかかってくる苦悶への

答えを探しながらこれからの日々を生きていく

おお親族よ、おお嘆き苦しむ者よ

時間の夜回り、血とワインと大地に

沈んだ見張り番、そうそれはわたしだ、

そのわたしの渴き、そのわたしの飢え、そのわたしの孤独、そのわたしの苦悶、

そしておのれのなかでわたしは内側から

終わりを迎えていく、天に向かって駆り立てる風のように。

永久に追放され、莊嚴、垂直、燃え盛る

島のうえを飛ぶ酩酊した鷺のように追放され

すでにいままで生きてきたことへの焦燥もなく

わたしは自分の聖杯の寝ずの番へとたちもどる

そしてなにも、これからの日々にはなにも期待しない

わたしの魂を砕く青い剣のほかには。

夏の絵画

I

雄鶏は午後の太陽だ

夏へと出てきてみんなで歌う

その羽はすでに血に赤く濡れ

おのれから飛び立ち去るのだが

高い穀倉に迎えられて留まる。

ワインで濡れそぼった羽を

水車が粉を挽きつづける午後に

雄鶏たちの目は雑草へと移動し

屋根は灰の空をほつれさせる

いつぼうほかの霜はガラス製の針金をたたき

牧草の雨が穀倉を浸食する

赤い列車が橋を渡り

フクロウの目をして永遠へと去っていく。

風景は 水車へとのぼっていく緑の用水路に

寒蛩を描く

用水路はすこしずつ進んでくる 遅れることもある

小麦の織りなす金のタペストリーとそのスケール

それは川が大理石の舌で蛩を呼ぶからだ

そして灰色の白石 とてもとても白い灰色の板が

車輪にうごめく日の支えになるが
石も板も日々も去っていく。

II

午後の雄鶏たちはわたしの野菜の夢

夏へと飛び羽を焦がす

太陽にさらされて焼ける赤い羽

いつぼう空は風に吹かれ叩き割られたようになかけらになつて落ちる

われわれは自由だと権利を主張する櫓も同じだ

針金に囚われた雲は玉のように丸まる

日中の永遠のあいだ針金が捕えているのは柱

それとも泡のような鍵 それともフレンチウインドウ

それとも雪のタペストリーのうえで燃えあがる小麦

それとも砂にひとつの数を書く鳥たちだろうか

金色に輝く本質のゴシック体のこの数を。

III

きみは 雄鶏つまりその炎の息子たちとともにいる

すべてが新たに生起し すべてはおなじみの儀式に戻る

炎にまかれた盲目の魚が一匹 日のまわりをまわる

この甘美な一月 雄鶏の合唱隊

それとも雄鶏たちの線状飛行すべてのセイケイたち

この蔽かな合唱隊、この血の合唱隊はまるごと

高い赤い屋根瓦の天井向けてそびえたつ

天井は雄鶏から抜け落ちる羽のように高くそびえ

緑の雄鶏はのちに抑圧されてその円のなかに

中庭にチヨークで描いた円に立つ子どもがひとり

朝の青い風を空へと放つ

菜のような緑の風は天へとのはる

そのあいだに雄鶏たちは目から火を投げる

フラスコのなかの美しい雄鶏たちを日が焼く

金でできた美しい雄鶏たちは塔へと登る。

IV

一体のカカシがむかしのバレエを踊る

穀物の野のうえを 雄鶏たちが一月の午後へと

青いのりものを牽いていく

太陽の銅のしたを羽の船がいく

そしてわたしは帰還を待ちながら下に居残る

その火が通ると雑草は膝を折る

青いのりものがいく 午後は知らん顔で生きている

雄鶏はみないってしまう

太陽は黄金の尾を屋根に置いて去る

（この太陽の尾は内側が葉でできている）
だが蛙たちだけは井戸に居残る。

V

草でできた風が星ばしのもとへと揚がる

列車はふたたびあの橋を渡る

そして川はみな陶醉した音楽で満ちる

葉の色は向日葵にまわる

そして蜜蜂は糸でできたおのれの檻で泣く

夏の昼寝で猫たちは遅れている

いま午後はその赤い永遠を懸けて骰子で遊ぶ

一月の雄鶏だ

いま午後はもう十羽の雄鶏以上にならない

雄鶏たちは硬い切っ先の形をした炎のうえで踊る

首をはねられた雄鶏たちが球面を倍にする

雄鶏たち、ああ、雄鶏たちその恐ろしい合唱隊。

見えない地域

犬と子どもと鳥が好きだ

わたしはこのあかるい空に

幼いころ両親がくれた薔薇を日々見いだす。

生きている薔薇で、輪郭は高く高くそびえ

子どものころある純粹な午後に見た夢が

そのなかではまだ連携する。

きょうわたしは思い出す、魔法の泉のほとりで

カタツムリと眠る蛙を見つけたそのたびごとを。

木材を流れる川よりもゆるやかな時だった

だが鏡のそばのタペストリーのうえのあたりは

今でも輝いている。

鳥たちは両翼から火を噴いていた

その子は風が入ってくる扉ぎわでうとうとしていた

そして犬は地中のなかの休息に加わっていた。

おのれの輪のなかの鳥の翼に風を

子どもたちに大地をそして白昼に犬を！

だが空は夢の根っこへと到来しますように。

帰還

夜のおかげで鳥々はさらに美しい

木々はさらに青い　というのも海が珊瑚のあかりに命じるので

そしてあかりはどれも海の望みに抗おうとは思わない

魚たちが尾びれを動かし　分裂にもうたくさんだと言い

鳥たちがガラスと　霜がびっしりおりた針金のあいだに卵を産み落とすとき

綿のチョークでデザインされた黄金性のうつくしい動物が

庭の黒板のただなかに突然現れる

踊り手たちが衣装を森へと運んでいくときにもこの光景は続く

光の濃度のおかげですべてはいつも通り

鏡に沈んだきみの顔

同時のラインのきみの顔はわたしを他の道へと連れて行く道だ

幼い日々に消えたあの道では

水車が終わるところから始まる海岸で他の子たちが丸石を探している

復活祭のモチーフが描かれた紙の風に反射するもの以外

星はなかった

扇からさす以外の光はない

穀倉が解いたその神秘がいま必要だ

景色が消える路地の先以外に光はない

登場人物たちが消えてゆくにつれわたしたちを

この予想外の帰還へと導いた梯子は不安定に揺れる紐に姿を変える

そのときの名残はこれですべて

しかしわたしたちを解放するまほろしはもうたくさんだ
別の音楽が網からたちのほり そのなかで丸石がいくつか輝く今となつては。

海の錬金術

海が正しいのは島にかなすることだけ

木々の言い分、雲の言い分

波が歌うとき海は正しい

海は一日ずつと正しい

針の音楽に関する珊瑚の言い分も一日ずつとだ

珊瑚が織りなすタペストリーでは見慣れない雑草が育つ

いま珊瑚は 永遠この方燃える炎だ

海は一日ずつと正しい

神秘の理由 自己充足する理由

美しい日感謝するため海は尾を振る

その雲の綿からおりてくる美しい日

というのも海は正しいからだ その深淵の目眩のなかで

日に日をついで海は正しく それで足りている

海の球面の音楽を信じるには他のものはいらない

翼と波の音楽

風が島から島へと広める音楽

海がどの瞬間にも正しいのだと知らねばならない

それが 島が雲に精通している理由だ

海に永遠性と運動をあたえる理由

魅了よりも純粹な魔術

独自の魔術

成熟した魔術

錬金術の魔術

おのれが重要だと信じる海は正しい

海はおのれの運命のあるじ

海は正しい 満ち足りているから

海はひとつの球面だ

もう何世紀も前から同じ点のまわりを巡り

まったく同一の輪を描いて回る

海は石の髭をはやした神々が永遠にたどったそのしるしだ。

夏の

ほんのわずかな草のあいだの顔

すべてが再生産する

広大な鏡のように

鏡のなかの船

オルゴールのなかの星

朝露のうえの道化

幼かったころ

メリーゴーランドの馬たちのように去ろうとしていた

葉のあいだで見つけたつぶやき

壁に囚われていた雑草は

鳥の飛翔のなかで自由になり

わたしの夢は鏡のなかで解放された

幼年期は船のなかで解放される。

ああ 真夏の雄鶏の羽

ああ 壁に沿うシユロの枝葉。

ふたつのソナチネ

I

わたしは忘却の旅人

おぼえない旅から戻ろうとしていた

見知らぬ道をたどり

失われた駅を

経由し

だれも待っていない場所へと戻ろうとしていた

恐怖のとびらを開けることができず

わたしの存在の内では牙を血だらけにした狼が吠えていた

すべての島、すべての雲は

わたしの塔だったかもしれない

しかし壁には忘却しかなかった

ああ、同心の僧房、その広大な

孤独がわたしの骨のあいだに集う！

わたしはすべての別離から戻ろうとしていたあの旅人

雲に埋もれた村をいくつもあとにしてきた

夜のなかで道はずれた数々の顔をも。

破裂したあの列車がすばらしい荷を下ろしていたとき

鐘の音はときにかすれ

わたしは手ぶらで降りてきた

わたしの目はとある古代の

塩のそして予兆の

死んだ幻影を運んできた

そしてわたしからすべてが逃げていつていた

わたしは忘却に沈んでいた

だが誰が不在の者たちを呼ぶというのか

開け、墓を開くのだ！

II

わたしが言っていたのはこうだ。忘我、ひとつの青、失われた沈黙

だが鳥からは誰も来なかったし その青そのもうひとつの忘我は

黄金色の植物性透明性のように遠くで

輝いていたちいさな鳥々の讃歌でなければ、

悲嘆にくれる雲の存在

海草の塔と 打ち捨てられた

水車の窓から

突然

入ってくる無限。

すると盲目の猫たちが絨毯のうえで呻き

神秘よりもさらにかすかな雨の

知らせのように曙が落ちてくる。

針金におりる霜の膜。

忘れられた時間

木々は午後を彩る

口にはせずすべてを言う

木々は丘で戯れる風にむかつてすべてを言う

風は鳥たちと戯れ、午後が過ぎ行くままにしておく

すべてのものがさらに魅惑の色を帯びる雪景色に

おのれのなかに地平線とその丸屋根を閉じ込めた

雑草の鳥 コルクの鳥がいる

水平線に星ほしが集う

その間に精液の油が一滴天からしたり落ち

虎の顔がふたたびあらわれる木々のあいだに野菜が育つ

猫が一匹の蝶を追うここ もつとこちら

化石となった避雷針よりもつとこちら

あの美しい島々とその雲よりもつと遠く

すべては偶然の一撃で改めて定められる

それは黄色い紙でできた水車のなかで猫が蝶をつかまえたからだ

水平線のうえて鳥が星々を檻に入れたからだ

鳥たちは黄金の種をつつく以外なにも知らない

そしてかれらは天を持ち去る、木々のあいだで輝く天を

その間にきみはこの光景に　バルの奥から出てきたかのように姿をあらわす

オランダの村娘がかぶるような白頭巾に光をいっばいたたえて

かつてなく美しいきみは幼年期から戻ったあのやさしいとこ

シードルのように透明な笑い声ですべてを満たすためにあらわれる。

挿画

わたしは古い文書を読んで一日を過ごす

だがとつぜんその勉強を中断する

この神聖なページのあいだを

わたしの本のゴシック体文字から蘇った

見えない金の蜜蜂が飛びまわるからだ。

この得体の知れない奇跡にわたしは驚く

何世紀にもわたって囚われ

この美しい手稿の青い紙のあいだで何世紀も

El tiempo olvidado

塵にまみれて生きた黄金の蜜蜂が
窓へとまた飛んでいくのを見る。

蜜蜂は 蠅や夜明けが

雑草へと落とすミルクで汚した
薄手のカーテンのまわりを飛ぶ。

太陽に向かって飛ぶために

蜜蜂は錠とガラスを壊そうとしている、古い父である太陽は
真昼の球面へ

夜には血の小麦へ

午後になるたびに泡だつコップへ

青みを帯びた像が描かれステンドグラスへ

根源の炎につつまれたアルピジェーラ⁽ⁱⁱ⁾へ

高みから逃げる鹿へ、

空を飾る珊瑚へと蜜蜂を呼ぶ

雲がはらむ水は純粹な娘たちで、

赤い屋根のあいだでも、

傷ついた木材の水車のあいだでも

丘の上で手間取っている。

わたしには 膝に支え持っている

この本のページでも

テールクロスにワインをこぼす

コップのほうへ 血の蜜が一粒転げていくように思える。

そしてわたしは暗闇にひとり残る

おのれの陰鬱な気まぐれと夢に囚われた

子どものようにとても孤独だ、

蜜蜂の去った本は闇に包まれ、

わたしはこの緩慢な忘却から、

隠された遁走から、なんとか

天使たちの追放を生きているこの島から

朝がわたしを解放しに来るのを待っている、

蜜蜂がいらないのでわたしはこの島で自分の忘却を忘れ

残酷な、荒涼とした時間に痛めつけられ

ついには このわたしの血という深淵のなかで泣いてしまう

膝をつかんばかりにして血は死へと逃げ込むために

目を見えなくされた極限から落ちてくる。

あの残酷な、美しい蜜蜂以外に わたしを夜明けに起こすものはあるのか

金色の羽あとを鏡に

残す その婚礼の歌以外に

蜜蜂は白い椅子から うっすらと積もった

埃のヴェールに包まれたガラスの内扉へと飛ぶ

そして青い円をいくつも描きながら

丸天井目指してのぼっていく

むさぼり食おうと狙う猫もいる

蜜蜂を見て虹だと思った魚も

ちいさな箒も蜜蜂を破壊しようとしている

しかし蜜蜂は飛翔と黄金の音楽という

二重の魔法を手にしたままだ。

廊下に停まることは決してない。

望みは天へと戻ることだけ

わたしの本の中で何世紀も住んでいた天へ。

カモメの高度で

愛は鏡のあいだに生きている

カモメのいる高さまでのぼる海のように。

カモメの高さまで

海はのぼり、鏡はのぼり、愛と詩がのぼる。

すべてを指示するのはこの怒れる海

血管から血管へ、川から川へ

柱のあいだを、丘を抜ける海だ

丘と言っても水に映る広大な丘で

たんなる幻影の話だが、その幻影に

目は剣のように襲いかかり

むきだしのこめかみはわたしたちの手を傷つける。

ここでは愛だけがおのれの暗色のサナギによって生きる

愛だけ、愛だけが、死だけが

追放された天使たちが時のうえに支える

純粹な夢のまわりに受胎した奇妙な景色から

戻ってくる、その失われた讃歌。

天使たちは鏡を支える

その間に下方では朝の海が

一日を始めようと柱のあいだに立ちのぼる。

大地であることに疲れた大地のまわりをゆく旅

から帰ってきた日を始めるために

朝の海から金のトランペットと

神々が住まう銀のくるまをたずさえてやってくる。

神々の住まうところにはふたたび愛が住む

詩と狂気が住む。

なぜならあかりの上の海の輝きだけが残るから

海を数えるきみの声だけが残るから

その間に巡礼者たちがその古い鏡を通り抜ける

亡霊に先導された巡礼者たちが夢のなかの
失われた都市の遺跡をいく。

ほかの町が見えてくる

丘も、川も

封印するかのようにわたしたちの唇に触れるため
名付けえない時間から戻ろうとしていた。

わたしたちの足どりを止めない幻影が

通りすぎていくあいだに

すこしずつ眠りに落ちていく血を抱えた

ワインのように 唇に触れるため。

幻影、星座、銀河。

すべてはあかりの数で繰り返され

ガラスの海はまるごと丘へとほる

一条の火によって予告されていた。

その火は鏡のところまでのほる

そこでは愛が水銀によって

星によって、すでに天上のものとなった地上の柱によって

速い油のようにこめかみのうえをすぎていく一匹の魚によって

まぶたのあいだに眠ろうとしている怒れる天使によって生きる。

脱出口

I

天は鳥たちが落ちるにつれ砕けて小片になる

海はこんな多くの時間多くの永遠多くの高さをどうしていいのかわからない

その小川を探す森の奥で

月の光に照らされたちっばけな森から赤い屋根の家々が見える

家のうえにはミルクの雲 雑草の雲が落ちる

葉の金の雪をきみが知らず見ないのだとしても

来て言ってくれ

蜜蜂でいっぱいなこの村が

そして珊瑚の翼を持った泡の鳥がなにを持っているのか

エメラルドの目の少女よ

言ってくれ 鹿たちはどこに行くのかその黄金の角の輝きを通してなにを探しているのか

言ってくれ この通りがおのれ自身よりもっとむこうまでのぼる水車の羽がどこで終わるのか

言ってくれ なぜ杉は天まで届きそれを天が知らないのかを。

II

水のこちらがわを鳥は行く

木々が切られるにつれ

鳥は旅に出る

ひとつひとつ

空に侵略されるたびに

鳥はその羽から落ちる

密林は魅惑と

きみの目のようなサファイアの下僕で満ちる

太陽以外のものは見えない

魚でいっぱい嵐以外のものは見えない

そして海が言うことを受け入れる以外にはない

無数の目を持つ海の。

海は空へとこぼれる油の木々でいっぱいだ

それは 雲から目覚めたひとつの夢である永遠に 天使たちがそう命じるからだ

永遠はきみ わたしの血の不眠の中心の動機だ。

III

宴のやさしい招待客のように迎えに出てきた島から

海はすこしずつ離れていく

海は木々のあいだをそぞろ歩く

そして毎朝名もない旅から帰ってくる

己の不在の息子に戻る

丘の柱のさまざまな各種氷山を経て

その海はいまおのれの恋人たちを探しに戻ってくる

海を愛することもある島じまのことだ

まだ始まって終わってもいない長い夢の美しく長身の姉妹たち

というのはみんなもう過ぎていったからだ金のくるまに乗った海以外

金のくるまに乗った海は世界の始まりの日に血色のルビーのように破裂するさだめの

夜明けへと旅する

そのとき愛をかたどった彫像は星に道を譲るためみずから開く

墓所からすくいだされるだろう

一度も見られたことのない星麦の穂の姉妹たち

約束された敵が手持ちの奇跡を寄贈するだろう

海が子どもたちの目のなかでふたたび命を得るときには

そして海の戦士たちが鷺によつて冠をさずけられるときには

ふたたび愛の魔法が救済されるさだめのだ

つまりこの空の娘たちのため

海がおのれの油とおのれの深淵からのぼってくる緑の石油で

侵入してくるとき 空はおのれの封印を開く

その深淵の底に沈んだ島に神々が住んでいる

石の頭、魚に目をむさぼり食われた神々

人間の夢から生まれたゆえに人間のきょうだいであり

別の歌を求めて海へ下る神々

それは詩人がじぶんの血のワインと短刀を求めて

おのれの奥底へと降りていくのに似ている

詩人はほかの時間を探し求めておのれ自身へと旅をするのだ

だが見つかるのは丘で泣いている子どもただひとりだ。

それは夜明けのこと。神々はもう見当たらない

海だけがかれを苦悩から救済する

海だけが球面を返してやる

海だけが血管にワインのように入りこむ

海だけが待つあいだに十本の銀の矢が傷つけたかれの脇腹を洗う

海だけがかれを傷つける矢

海だけが砂の鏡にかれの姿を刻む

海だけが神々よりも永遠

海だけが銀河のうしろだてになる

海だけが小麦を金に染め、ドーリス式表面に深淵の青を与える

海だけが夜な夜な灰と死に勝利するのだ

祖父

子どもたちの、小麦の、鳥たちの友

緑なす丘で歌いながら一日を過ごして

行ってしまった。翼ある手のような

日陰をいつものように提供してくれた木のしたで。

あのやさしい祖父はこんな人だった

午後になると火のそばに腰を下ろして眠り

聖人さながらに辛抱強く自分のぶんのワインを待った。

一日が灰の一撃で死に

太陽が牧草のうえに血のしみを残すころ

野を耕す馬、草を食む家畜がいる田舎の

まぼろしとその目に棲んでいた。

祖父はほぼケルトの血筋で島から来た。

若い頃 見知らぬ世界への旅に乗った船を

思い返しながらパイプを吸った。

高貴な紋章の入った版画を持っていた

金色に輝くあごひげは

国を追われて他国を侵略した王を思わせた。

落ち着きがあり好戦的、勇猛で、深い悲しみを抱いており

聖書でキリストの教えを読んでいた。

愛する者たちのために生き、旅の本を一冊残した

木製の杖はまだ祖父の手と

頑健な拳の野生の強さを覚えている。

終わりの日々には愛する孫たちを得た

豊かな知恵のおかげで

その足で踏みつけた地域の男という大層な別名がついた。

わたしは気高い祖父を思い出しながら泣いている。

愛していた地で祖父は永遠にこうして生きている。

そして今日 飾りがほどこされた拍車をつけてわたしの記憶に戻ってくる。

ああ、失われし日々の移牧の客よ！

註

- (i) チリの詩人カルロス・デ・ロッカ (Carlos de Rokha, 1920-1962) の死後に出版された詩集『雄鶏と道化のパヴァース』(*Pavuna del gallo y el arlequín*, Ediciones de la I. Municipalidad de Santiago, 1967) の前半十二篇を訳出した。
- (ii) 日常的なモチーフを扱ったパッチワークキルト